



winter 2017

開智国際大学 LIBRARY NL

Library Seasonal Menu Topic : “enjoy WINTER”
Library News / New Arrival Books

Library Seasonal Menu in Winter

冬本番。毎日寒くて、外に出るのが億劫になりますね。今回のSeasonal Menuのテーマは“enjoy WINTER”！冬にまつわる小説を中心に集めました。家にこもっておもいきり読書にふけるのもよし、あえて寒い土地に行って温泉やウィンタースポーツを楽しむのもよし。思い思いの「冬」を楽しみましょう！

New Arrival Books Information

奥田亜希子『五つ星をつけてよ』17001746／古谷田奈月『望むのは』17001745／大村智『ストックホルムへの廻り道』17001744／西野亮廣『革命のファンファーレ』17001734／米沢穂信『満願』17001730／宮部みゆき『過ぎ去りし王国の城』17001729／東直子『薬屋のタバサ』17001728／カルミネ・アバーテ『ふたつの海のあいだで』17001727／渡川修一『1人でできる!3日で完成!事例で学ぶ1分間PR動画ラクラク作成ハンドブック』17001716／杉山麻里子『ルポ同性カップルの子どもたち』17001715／斎藤孝『文系のための理系読書術』17001714／小松成美『虹色のチョコレート』17001713／千葉雅也『勉強の哲学』17001712／井上優『明治大学シェイクスピアプロジェクト!』17001707／桐野夏生『夜また夜の深い夜』17001706／カール・E.ワイク『想定外のマネジメント』17001705 ほか

Library News

ビブリオバトル2017開催

10月29日(日) 柏学祭2日目、図書館にて知的書評合戦「ビブリオバトル」を開催しました。

6名のバトルが、5分間の持ち時間でおすすめ本を紹介。オーディエンスの投票の結果、リベラルアーツ学部3年・鈴木雄貴さんが紹介した『バカの壁』がチャンプ本に選ばれました。

鈴木さんは柏市内大学図書館の「本選」(東京大学・二松学舎大学・麗澤大学・本学の各代表者によるバトル)にも出場し、魅力的な発表で会場を沸かせました。当日の様子は本学ホームページに掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

開館時間のご確認を

年末年始、および大学の授業のない期間は、開館時間がイレギュラーになります。あらかじめご確認の上、ご来館ください。



開智国際大学図書館

<http://www.kaichi.ac.jp/library/>
04-7167-8655(tel) 04-7163-0096(fax)

開館時間: 月～金 9:00～18:00
※開館時間の詳細は上記HP、または図書館カウンターにある開館カレンダーをご確認ください。

北村薫『鷺と雪』

表題作「鷺と雪」ほか、子爵失踪事件を解き明かす「不在の父」、受験を控えた少年とライオンをめぐる謎を描いた「獅子と地下鉄」の三篇を収録。昭和初期の上流階級を舞台に、良家のお抱え女性運転手〈ベッキーさん〉が活躍する日常ミステリシリーズ最終巻。謎解きももちろんですが、時代背景を感じながら読んでみてください。その先の世を知っている、平成に生きる私たちだからこそ、最後の一文にハッとさせられます。

道尾秀介『ノエル』

真保裕一『ホワイトアウト』

重松清『きよこ』

北村薫『冬のオペラ』

佐藤多佳子『聖夜』

牧師の父とピアニストの母のもとに生まれた鳴海一哉は、高校のオルガン部に所属しており、卓越した演奏技術をもつ。幼いころに家を出て行ってしまった母への複雑な思い、聖職者であり常に「正しい」父と接すると湧き上がってくる、行き場のない怒り。様々な葛藤を抱えながら、鳴海は母が一番好きな作曲家であったメシヤンのオルガン曲に挑戦することになる——。何度も心が揺さぶられる、本格派青春小説です。

近藤宣昭

『冬眠の謎を解く』

冬眠で寿命が伸びる？冬眠できないと鬱になる？ヒトはすでに冬眠している？——「冬眠」の研究に従事してきた著者が、冬眠の真の姿を描き、「人工冬眠」実現の可能性について示唆しています。

いしいしんじ

『雪屋のロツスさん』

ヨハン・ロツスさんは有名な雪屋です。ふだんは、トラクターに似た造雪車に乗って、ほうぼうの街をまわっています。——「床屋」「サラリーマン」といったなじみのある職業から、ちょっと変わった「なぞタクシー」「棺桶セールスマン」「雪屋」まで。189ページの中に、30の仕事を持つ人々の30通りの不思議な物語が詰まっています。

別冊太陽『温泉力』

飯島勝彦『冬の風鈴』

黒木亮『冬の喝采』

英語版あり スティーヴン・キング

『スタンド・バイ・ミー 恐怖の四季 秋冬編』/The Breathing Method

“恐怖の四季シリーズ”の秋・冬2編を収録した本書。冬編「マンハッタン」の奇譚クラブの舞台は、ニューヨークのとある会員制社交クラブ。ここではいつも、お酒や焼き立てのソーセージと共に、会員の語る奇譚が供されます。クリスマスを控えたある日、老医師が話し始めたのは、美しい妊婦をめぐる何とも不思議な物語でした。映画でも有名な秋編「スタンド・バイ・ミー」とともに、恐怖の冬をご堪能あれ。

松田忠徳『古湯を歩く』

温泉学の第一人者であり「温泉教授」の異名で知られる著者が、日本の名湯を紹介しながら、温泉場と日本人の精神性との関わりを紐解く一冊。日本を代表する温泉の歴史的背景が、写真や地図とともにわかりやすく解説されています。この冬行きたくなる温泉にきっと出会えます。

LIBRARY SEASONAL MENU IN WINTER

“enjoy WINTER”!

梨木香歩

『雪と珊瑚と』

21歳にしてシングルマザーとなり、娘の「雪」をひとり育てる母・「珊瑚」。貯金も底をつき、働きに出なければならないが、保育園も託児所も空きがない。途方に暮れたとき目に入ったのは、「赤ちゃん、お預かりします」と書かれた貼り紙だった——。孤独だった珊瑚が多くの人に出会い、助けられることで、娘の雪と一緒に成長していく物語。人のあたたかさに触れて変化していく母娘の様子は、心の「雪解け」を感じさせます。

吉田修一

『初恋温泉』

温泉にまつわる、5組の男女の物語からなる短編集。夫婦・高校生・不倫カップルなど、様々な関係性の男女が登場し、温泉を舞台に人間模様を繰り広げます。著者の代表作『悪人』や『怒り』とはまた違った味わいのある作品です。

乙一『箱庭図書館』

「ホワイト・ステップ」：母をなくしたばかりの女子高生・ほのかは、ある雪の日、誰もいない公園で奇妙な靴跡を発見する。公園の入り口からベンチまで続くその靴跡は、そこで途切れており、ベンチからどこかへ向かった形跡がないのであった。時を同じくして、大学院生の近藤も、自分以外誰もいなかったはずの公園で、気づかないうちに新しい足跡が出現するという体験をしていた。ほのかと近藤の人生は、やがて不思議な形で交わっていく——。

堀江敏幸

『雪沼とその周辺』

山あいの寂れた町「雪沼」に暮らす人々の心の機微を描く、連作短編小説。架空の町「雪沼」には、もちろん誰も行ったことはありませんが、読み進めるうちになんと叫ぶような郷愁感に襲われます。

英語版あり

シェイクスピア『冬物語』/THE WINTER'S TALE

シェイクスピアが描くロマンス作品。主人公は、王妃の心を心から愛するシチリア王。しかし、愛しすぎるあまり「親友・ボヘミア王と不倫しているのではないか？」との疑念に取りつかれてしまいます。壊れる友情、愛する王妃と息子の死、不義の子として捨てられた娘……。嫉妬が生んだ惨劇の数々は、このまま悲劇に終わってしまうのか。それとも、幸せな大団円となるのでしょうか。

トーベ・ヤンソン『ムーミン谷の冬』